Relo / Sobelated Reposit	ory of Academic resouces
Title	歴史事象の一回限り性について
Sub Title	On the uniqueness of historical events
Author	神山, 四郎(Koyama, Shiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.2 (1959. 7) ,p.34(162)- 53(181)
JaLC DOI	
Abstract	There is a classical statement: while natural science has as its objects things that repeat themselves, historical science deals with unique events. This is why the former is said to be a nomothetic science and the latter idiographic science. But such a scheme of division seems to me too rigorous and too formalist. To be sure a historical survey of the philosophy of history in Europe reveals some such metaphysical premise peculiar to Christianity, but this premise is of such a nature that we cannot reasonably prove it. The idealistic philosophers of history have tried to draw out the absolute nature of history from it, and consequently fallen into an exaggerated sort of spiritualism and intuitionism. Is there no way to grasp the uniqueness of history but by telepathy? Our answer to this question runs as follows : 1. The "uniqueness" of history is not a simple quality which each historical event possesses, but the uniqueness of interest or standpoint which characterizes each historian. 2. So it is something relative. 3. Moreover the historian makes use of universallaws and general terms in his unique individual descriptions. 4. The historical events themselves do not in any way exclude the possibility of being generalized, of being, that is, viewed as repeating themselves. On the other hand, historical science should not be regarded in the same light as natural and social sciences, nor is it a mere application of the latter. Explanation in historical science does not stand on the same level as explanation in science. In contrast to the latter which always explains in terms of instance and generalization, the former does so in terms of theme and illustration. Thus in this paper we seek to find the true nature of historical explanation between idealism and scientism.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590700- 0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(I) まずそれは最初に、世界觀の問題として、ギリシャ人が無限回歸的な圓環行程として見ていた歴史を直線行程もともとこの「歴史の一回性」ということは、一つの思想として長い歴史的背景をもつている。	「文化科學」に、ディルタイが「精神科學」に屬するものとしたのは、いずれもそういう根據からである。「個別記述學」に分けたことから、歷史學は自然科學とは違つた學として見られるようになつた。リッカートが歷史をれは、十九世紀の終りにヴィンデルバントが Nomothetic science と Idiographic science 即ち「法則定立學」とくり返すものを扱うのが自然科學で、一回限りのものを扱うのが歷史である、という一つの古典的な命題がある。こ	五、歴史の科學的說明の可能性四、歷史的說明と理論的說明二、歷史事象の一回性の根據一、歷史の sui generis の主張一、歷史の一回性の形而上學的前提		歴史事象の一回限り性について	史 學 第三十二卷 第二號
1	raphic れるよ		神		0
程として見	いずれもそういう根據からである。て見られるようになつた。リッカーである、という一つの古典的な命師		Щ		(1×1)
こていた歴	1典的な命		四		三四
史を直線行	からである。 いッカートが歴史 いら「法則定立學」		郞		·
程	をとこ				

(一六三) 三五	歴史事象の一回限り性について
くのを保證するものは何か(今ここでは その力や目的は 問わない)。	その歴史に新しい要素を加えて進步充實させてゆくのを保證するものは何か
しかもそれを獨自の目的觀から「充實」といい「進步」と見る。では、	變つてゆくということを認めているわけである。
こいうところに、全體としての歴史は新しい要素が附加されて 次 第に	ではなく、「同様」uniformi のくり返しであるというところに、
無限回歸說を復活したルネサンス精神を見ることができよう)、しかしそれが「同一」identici のくり返し	ギリシャの無限回歸說を復活したルネサンス精神
て見ているが(これを「永遠循環」 eterno circolo というところに	うに作用するところから、歴史をくり返しにおいて見ているが(これを「永遠循環」
――それを「周流の法則」という――それが諸民族・諸文化に同じよ	交互に働き合う一つの精神的なリズムを發見して――それを「周流の法則」と
G. Vico の場合、彼は歴史の中に「正流」corso と「逆流」ricorso の	(Ⅱ) それが近代になると、例えばヴィコ G
	としては根本的に mysterious である。
味をもつてくる。だから歴史が一回的だということは、一つの世界觀	とによつて、歴史の一回性ということが一つの意味をもつてくる。
的な信仰命題として與えられているだけである。それを受けいれるこ	驗の及ばない從つて合理的に證明のできない超越的な信仰命題として與えられ
ことはわれわれの知識の限界を越えている。それはただわれわれの經	という條件が必要である。しかしこれを保證することはわれわれの
	(3) その間の進行が時間の上に刻まれてゆくこと
あること	(2) 從つて歴史に一度限りの始めと終りがあること
رج ۲۲ ۲	(1) 人類の歴史が單一な全體をなしていること
そのような歴史の構造には(その「目的」はここでは問わない)、まず、	りのものと考えられるようになつた。しかし、ス
度限りの前進的な軌道の上にのせた。そこから歴史は元に戻すすべのない一回き	から解き放つて、一つの目的に向う一度限りの煎
ちにあらわれている。キリスト教は、人類を無意味な歴史の循環の環	として見るようになつたキリスト教の歴史觀のうちにあらわれている。

事象

1

する。だからこの一回性ということは(1)反復事象を保證する機械論にも、(2)また歴史の方向を先験 的 に規定す	
しようとして、まず出來事を循環的・週期的に反復するものと、一回きりのものに分ける。そして後者を歴史の對象と	
(Ⅳ) 次にシェリング F.W.J.Schelling がやはり歴史の一回性ということを云つている。彼は歴史の對象を規定	
歸する。	
生命哲學につらなるものである。結局この歴史の一回的ということは個體の不可述性 (Individuum est ineffabile) に	
れはたしかにリツト(Th. Litt)がいうように「歴史的生の構造」であつて、十九世紀の個體主義、ディルタイなどの	
という。このように民族個體が一定の時間・空間點におかれるのだから、歴史の次元は一回限りということになる。こ	
の三要素に限定した。一つの民族が或るところに或る時生存する、この三要素は不可分でいつさい抽象してはならない	
殺してしまうのに反對して、歷史の構成要素を「空間と時間と民族性」(Ort, Zeit und der Charakter des Volkes)	
蒙的な合理主義がコスモポリタニズムとなつて歴史の合理的・合法的進步を强調するあまり各民族・各時代の特異性を抹	
回的な有意味性はうけついで、それを歴史の本質に歸屬させて行つた。まずヘルダー J. G. Herder の場合、彼は、啓	
(Ⅲ) こうしたキリスト教的歴史形而上學の前提の上に立つ近代歴史哲學は、その宗教性はひき拔いても、歴史の一	
ト教的ヨーロッパ人だからである。	
いるわけである。論證以前の問題である。だからこういう形而上學的前提をうけいれているのは、結局ヴィコがキリス	
ての歴史の一回的な新しさを捉えるのは科學外のものとされる。要するにそれは彼においては、事實として承認されて	
き合う諸文化の「類型」tipo と、諸民族間の歴史の「一致」 consenso を發見するのが科學であつて、この全體とし	
それは結局全體としての歷史が一回的だということであろう。しかもヴィコにとつては、その corso と ricorso の働	
史 學 第三十二卷 第二號 (一六四) 三六	

(1六五) 三七	歴史事象の一回限り性について
文化科學という價値範疇の方向へ向けられてしまつた。	史學はまた自然科學から外らされて、文化
に求めて行つたので、せつかく個別化的方法が或る程度まで理論づけられながら、歴	結局價值關係 Wertbeziehung に求めて
、と見た。それならこの個別化の原理は何かといえば、リッカートはそれを	を目的とする歴史學は個別化的方法による、と見た。
定義しようとして、普遍を目的とする自然科學は一般化的方法により、特殊	H. Rickert はさらにそれを學の目的から定義しようとして、普遍を目的とす
しかしこうした單純な圖式で兩學の定義をすることは不充分で、リッカート	云葉がひんぱんに使われるようになつた。しかしこうした單純な圖式で兩學の
idiographisch な學を歷史學とした。これから歷史の Einmaligkeit という	科學とし、 was einmal war を扱う id
と歴史を對立させて、was immer ist を扱う nomothetisch な學を自然	れた。ヴィンデルバントも同じように自然と歴史を對立させて、 was
「法則化不能」という點から見る見方は、ヴィンデルバント W. Windelband によつてさらに進めら	この一回性を「法則化不能」という點か
	史は自然科學とは別種のものである、という。
りの發展として見る歴史を峻別した。そして煎者が法則化可能なのに對して、後者は法則化不能であるから、歴	一回限りの發展として見る歴史を峻別した
然科學的方法を歴史學の中に引き入れるのに反對するところから、まず出來事を反復するものとして見る自然に對して	然科學的方法を歴史學の中に引き入れるの
ロイゼン J. G. Droysen の場合、彼は、バツクルのような自然主義者が自	の問題として扱われるようになる。まずドロイゼン J. G. Droysen の場合、
これまではだいたい歴史の存在、歴史の對象の問題として扱われてきたが、十九世紀の半ば以後は歴史の方法	(V) これまではだいたい歴史の存在、
るから、つまり歴史は自然に對立する精神において一回的のものとされる。	うことになれば、それは結局「精神」であるから、
自由において見ることは、ひるがえつてその自由を保證するものは何かとい	つわけである。このように歴史の一回性を自由において見ることは、
一回性ということはその必然に對する「偶然」または「自由」という契機において成りた	を「必然」といえば、歴史の一回性という
にも反對の概念として措定されている。だから機械的な意味でも先驗的な意味でも事がらを規定するの	る Apriorism にも反對の概念として措定

J

一九四六年にコリングウッドが(The Idea of History)をオックスフォードから出したとき、その余りにはつ
立たない努力が表面に出てきたのは第二次大戰後のことである。それには一つの問題史的なきつかけがあつた。
のカゲに地味な歴史の諸原理の分析をつづけてきたイギリスの經驗論者の存在も忘れられてはならない。その目
歴史家の反撥を招いたことは、ランケを引合いに出すまでもない。しかし、その壯大な世界史の形而上學的構想
う。卽ち、今まで歴史哲學といえば、ドイツの觀念論哲學のそれが一般に知られて、その先驗的な歴史規定論が
なお、こうした歴史の分析論が「歴史哲學」の名においてなされていることについては若干の解説が要るだろ
Nowell-Smith 等の科學主義者(廣い意味での)の批判と分析を一つの手がかりとして若干考察してみたい。
wood に對するポッパー K. R. Popper ガーディナー P. Gardiner ドレイ W. Dray ノウェル・スミス P. H.
析論の極く基礎的な一部分において、クローチェ・ディルタイ的な精
しないか。歴史學は果して科學と無關係または並行的に進みうるものかどうか。本稿はこの點について、現代イギリス
義を必要以上に多く引き入れることになりはしないか。そうすれば、近代史學の要請である科學化ということに背きは
的な契機において云われている一回性というものをもつて歴史學の基礎とすることは、歴史學の中に精神主義と直觀主
ては「精神の自由」において、(4)歴史の方法としては法則化不能のものとして主張されているが、こうし た 非合理
ストの救濟史)として、(2)また歴史の次元の劃定原理としては「個體の生命」として、(3)歴史の對象規定におい
要するに歴史が一回的だということは、(1)キリスト教的な信仰命題に基く形而上學的な世界觀(その中 心 はキリ
史 峰 第三十二巻 第二號 (一六六) 三六
と、「シートニシ」に見ていていた。 シート・シート シー・シー・シー・シー・シー・シー・シー・シー・シー・シー・シー・シー・シー・シ

學 第三十二卷 第二號

(1 六六)

三 入

生命が何ものにも拘束されない精神の自由において發現する一回的なものである、とすれば、それならそれはどうやつ
イデアリストのいうように、歴史というものは、いかなる類型いかなる法則によつても捉えることのできない個體の
歴史哲學の現狀と見てよいだろう。
の先に分析をすすめてゆく努力が一つの歴史學の原理の「基礎工事」spadework をしている、というのがこの
して、Laws and Explanation in History, Oxford, 1957 を書いた。こうして批判の上に批判を重ね、分析
快積極的なのに反して歴史的説明を科學主義(狹い意味での)に導く危險に對しては消極的なのをドレイが指摘
越えられ、そしてこれが一つの足場になると同時にまた批判の對象にもされて、ガーディナーの觀念論批判が明
ウォルシュの立場はガーディナーの The Nature of Historical Explanation, Oxford, 1952 によつて乘り
Ryle のようなすぐれた tutor の下に若い學者がその任をになつた。 觀念論に對してまだ多分に折衷的だつた
歴史そのものの科學性の分析へと向つて行つた。このウォルシュの外にベルリン Isaiah Berlin やライル G.
それからアメリカへとこの歴史哲學は、從來のドイツ風の觀念論的歴史哲學を批判しながらそれを媒介に次第に
けで、コリングウッド批判は新しい歴史哲學の一つの共通のテーマとなつた感がある。こうして戰後のイギリス、
Walsh が一九五一年に An Introduction to Philosophy of History を書いて初太刀をつけたのがきつか
に投じられたため、たちまち諸家のきびしい批判を招いて、學界の一つの焦點となつた。まずウォルシュ W. H.
きりしたクローチェ的觀念論・ディルタイ的直觀主義が、他ならぬ經驗論と實證主義のイギリスの學界のまん中

歴史事象の一回限り性について

(十六十)

三九

. .

歴史事象の一回限り性について、	イデアリストは結局そう結論して、そこに歴史學の sui generis を主張するのという結論を引き出すならば、それは誤りである。	る法則に從うことも、同報的」「分類的」term	える。たしかにこのことは廣い意味では正しい。しかしこのことから、	命を見て喜べばいいので、それ以上の目的はないと云つているのは、端的にこの意味を表わしているものといのとのとのとの目(種)に入るかということを考えるのでなく、この花を(この花のために)見て喜ぶように、ただ個別的な生	ということである。こういう主張は昔からなされている。例えばランケが、「この	(2) 一般化への志向をもたないということ、卽ち個別を一般法則化したりへ	instance)とは見ないということ、	(1) 一般的なものから演繹しないということ、即ち或る個別的な事象を一処	のと考えてもいい。このことは分析してみれば、個別的なものを、	家は出來事をその unique individuality において見るのであるから、その意味	クローチェをはじめドイツの歴史主義者の多くの人たちは、歴史を個別的判斷と	するのにはどうしても觀念的な無理がある。視するには余りにも强固なものがある」のを認めてはいるが)、それを一般的な厥	
(一六九) 四一	generis を主張するのだから、まずその考え方を見てみよ	じ種類の他の事象に同化さすこともできない、も使つてはならない、		のは、端的にこの意味を表わしているものとい化のために)見て喜ぶように、ただ個別的な生	例えばランケが、「この花がリンネのどの綱(類)オーケン	即ち個別を一般法則化したり分類したりしない、		即ち或る個別的な事象を一般法則または、類型の一例(example,		その意味で個別的判斷と歴史的認識を同じも	歴史を個別的判斷として特徴づけている。たしかに歴史	般的な歴史的認識として 歴史の説明の原理に	

史 學 第三十二卷 第二號	(1七〇) 四二
う。例えばクローチェは、「出來事の vision が歴史の唯一の源泉である」と	ある」というが、それならたしかに、その一つ一
つのヴィジョンにおいて歴史は unique である。Uniqueness ということが	うことが當然歷史の固有の質(qualia)となる。
それなら、そのヴィジョンはどうして得ることができるか。それは「直觀」するより他ない。今クローチェの分析によ	直觀」するより他ない。今クローチェの分析によ
れば、彼は、歴史の記述を主語と述語に分けて、歴史家がその記述の主語に何	主語に何をとるかというと、一つの史料を isola-
tion して、その上に或る人、或るもの、或る事がらを直觀して――ここで「直觀」という―	ここで「直觀」という――それを個人的判斷の主語
とする、そして述語の概念的・論理的操作においてその主語がどうあつたかを述べる、というわけである。しかし歴史	つたかを述べる、というわけである。しかし歴史
の記述は本來 informative なものであるから、經驗に基いて、入に	なものであるから、經驗に基いて、人に通ずる云葉を使つて、理の通る(いわゆる plau-
sible な)説明をしなければならない。そうなれば、 どんな特殊な事がらであ	がらであつても、それに最初に一つの云葉をあて
はめるだけで、もうそこには一つの classification を前提していることにな	ことになる。例えば、ここに一通の書簡をとりあ
げてみる。それについて歴史家はその記述の主語に何をとるかは自由である。	である。發信人にとることも、受信者にとること
も、その手紙に語られている人、もの、事がらにとることもできる。	そのどれにきめるかを直觀といつてもいいが、述
語の部分になると、その人が政治家で、とか、いついつの會議で、というだけ	いうだけで、もうそこには政治家のジャンル、會
議というものの一般的定義――勿論嚴密な意味においてではなくても	ー勿論嚴密な意味においてではなくても――を前提しているわけである。だから今この
人、或いはこの會議がそれの一人または一つであるということは、或る意味で	る意味でそれがくり返しているともいえる。歴史
的説明とはそういうものである。だから「直觀」といつても、事物の	「直觀」といつても、事物の直接認識による本質直觀というような哲學的なも
のではなく、主題の主語をきめる reference だけのものである。だ	だからこれだけの理由で科學的認識とは違うという
のは少し無理である。この「直觀」ということをもつと極端に强調すれば、個	^れば、個人個人の直接經驗によらなくてはならな

「Lとつてほとんど意味がない。 こ こ こ こ こ こ こ たから「そのもののもつていて他のものがもつていない或る特徴を記述することであったとしても、それを絶對的というからには、その出來事の無限の特質のすべてをないから、結局それはできない。 たから「そのもののもつていて他のものがもつていない或る特徴を記述することであったとしても、それを絶對的というからには、その出來事の無限の特質のすべてをないから、結局それはできない。 たから「そのもののもつていて他のものがもつていない或る特徴を記述することであったとしても、それを絶對的というからには、その出來事の無限の特徴のすべてをない。 たから「そのもののもつていて他のものがもつていない或る特徴を記述することであったとしても、それを絶對的というからには、その出來事の無限の特質のすべてをない。 たから「そのもののもつているように、「社會のどんな特殊な事件も單獨な出 ポッパー K. R. Popper も云つているように、「社會のどんな特殊な事件も單獨な出 ポッパー K. R. Popper も云つているように、「社會のどんな特殊な事件も単獨な出 がって、「或る一つの分類語の中に入らないもの」といつてもいいし、もつと碎いて「歴 をで、「或る一つの分類語の中に入らないもの」といってもいいし、それは「或る點から見てい たで、「或る一つの分類語の中に入らないもの」といってもいいし、それは「或る點から見てい とで、「或る一つの分類語の中に入らないもの」といってもいいし、もつと碎いて「歴 をするに、歴史の一回的ということは相對的に解されなければならない。 (してして)				
そのているように、 といいかえれば しかし同時にそれ る」といいかえれば の」といいかえれば の」といいかえれば でもいい。		ついて	歴史事象の一回限り性について	
家が現在化した過去の事實を精神の中で後にはこの二つの赤いものを赤いとすら しかし同時にそれを語ることもできな しかし同時にそれを語ることもできな しかし同時にそれを語ることもできな い。 いって他のものがもつていない或る特徴を いて他のものがもつていない或る特徴を いて他のものがもつていない或る特徴を いったいいのよれば間違わない。それは ーに入らないもの」といつてもいいし、 しもいい。	特殊な事件も單獨な出來事も、或る意味で新	も云つているように、	— K. R.	だか
家が現在化した過去の事實を精神の中T後にはこの二つの赤いものを赤いとすら後にはこの二つの赤いものを赤いとすらい。 しかし同時にそれを語ることもできない。 といいかえれば間違わない、といわない。 いて他のものがもつていない或る特徴をい。 の」といいかえれば間違わない。それは の」といいかえれば間違わない。それは っといいかえれば間違わない。それは	ならない。	一回的ということは相對的に解されなければ	(3) 要するに、歴史の	()
後にはこの二つの赤いものを赤いとすん後にはこの二つの赤いものを赤いとすん後にはこの二つの赤いものを赤いとすんしかし同時にそれを語ることもできない。 いて他のものがもつていない或る特徴をいて他のものがもつていない或る特徴をいて他のものがもつていない或る特徴をいて他のものがもつていない或る特徴をいて他のものがもつていない或る特徴を		こといつてもいい。	き方のちがうもの	
る」といいかえれば間違わない。それはないで他のものがもつていない或る特徴をいっからには、その出來事の無限がらを unique individuality において他のものがもつていない或る特徴をいて他のものがもつていない或る特徴を		の分類語の中に入らないもの」といつてもい	とで、「或る一つの	•
後にはこの二つの赤いものを赤いとすら後にはこの二つの赤いものを赤いとすら後にはこの二つの赤いものを赤いとすらる何か絶對的な特質ではない、といわなって他のものがもつていない或る特徴をい。 いて他のものがもつていない或る特徴をいった		心を集中する」といいかえれば間違わない。そ	viduality に關心	•
なっ しかし同時にそれを語ることもできな しかし同時にそれを語ることもできな る何か絶對的な特質ではない、といわな というからには、その出來事の無限 いっ のものがもつていない或る特徴を	おいて見る、ということは、「unique indi-	どの、事がらを unique individuality に	う。だからさきほ	
すめというからには、その出來事の無限での一か絶對的な特質ではない、といわなる何か絶對的な特質ではない、といわなこは、	像を記述することである」といえばよいだろ	がもつていて他のものがもつていない或る特	(2) だから「そのもの	· ()
判的というからには、その出來事の無限る何か絕對的な特質ではない、といわなる何か絕對的な特質ではない、といわなこは、	6	れできない。		
る何か絕對的な特質ではない、といわなそれ、現在化した過去の事實を精神の中、家が現在化した過去の事實を精神の中	無限の特質のすべてを 説明しなければならな	それを絶對的というからには、その出來事の	あったとしても、	
これ、	わなければならない。またもし絕對的特質が	もつている何か絶對的な特質ではない、とい	(1) まず、そのものの	1
しかし同時にそれを語ることもできな後にはこの二つの赤いものを赤いとすら家が 現在化した過去の事實を精神の中		そいうことは、		だか
しかし同時にそれを語ることもできな後にはこの二つの赤いものを赤いとす。家が 現在化した過去の事實を精神の中				
しかし同時にそれを語ることもできな後にはこの二つの赤いものを赤いとす。家が 現在化した過去の事實を精神の中		心味がない。	文家にとつてほとんど意	は 歴 史
人によつてみな違うから、最後にはこの二つの赤いものを赤いとすらいうことができなくなる。そうすれば、ノローチェ流にいえば、「歴史家が 現在化した過去の事實を精神の中で 再經驗する」ということになるだろう	さなくなる。こういう uniqueness の特質		このものが一回的になつ	すべて
イローチェ 流 にいえば、 「 歴史家が 現在化した過去の事實を精神の 中で 再徑驗する 」 ということになるだろう	すらいうことができなくなる。そうすれば、	うから、最後にはこの二つの赤いものを赤いと	仁験は人によつてみな違う	が、ア
	中で再徑驗する。ということこなるだろう	だ、「歷史家が 現在化した過去の事實を精神(っ、クローチェ流にいえ	いから

史 學 第三十二卷 第二號	(======================================	
に似ているが、或る一定の點から見れば常に一回的である のであろう。卽ちこのしいといわれるのである。 それは他の出來事に 分類されることもできる。 だから或	vniquenes	卽ちこの uniqueness ということは、この。 だから或る點から見れば これ これの出來專
「或る意味で」とか「或る點から見て」ということにかかつているので、對象の事が	らから出て	の事がらから出てくるのではない。 従つ
てその事がらとしては、一般化や分類への關心において見られるのを排除するもので	ものではない。勿論、一	3論、一般化や分類をす
るのは科學の目的であつて、歷史の目的ではないから、歷史家がそれをしないだけで、		個別的なものが絶對に一回限り
なのではない。だから科學と歷史は同じ個別的なものに對して、それを generaliza	generalization \mathcal{A} instance	nstance の關係におい
て見るのと、theme と illustration の關係において見るのとの違いだけである。見方の criterion の違いの問題で	見方の crit	erion の違いの問題で
ある。Direction of inquiry のちがいといつてもいい。例えば一例をあげてみよう。一六八八年に起つた名譽革命を	。 一六八八	年に起つた名譽革命を
一回的な出來事とするには、それが一六八八年に起つたという點から見れば一回的だが、そ して ま だ 他 に も それを	たが、そして	しまだ他にもそれを
unique とする aspect はあるが(だから相對的なのである)、それをイギリスの茎	中命という 點	スの革命という點から見ればピューリタ
ン革命とも共通だし――その點でくり返しているといつてもいい――近代市民革命と	という點から	ー近代市民革命という點から見ればフランス革命と
も同種のものである。もつと廣く革命一般という點から見れば、ロシア革命とも辛玄	※革命とも共	も辛亥革命とも共通である。だから、
(1) 歴史の事象は觀點によつて一回的とすることも反復的とすることもできる。	් ද ද	
それからもう一つの點は、その名譽革命がどんなに unique な出來事であると記	記述されても	ると記述されても、その説明のステート
メントの中に、例えば「王」とか「議會」とか「革命」とかいうような general to	erm を一つ	general term を一つも含まずに述べること
はできない。それを拒否したら歴史の説明はできない。また逆にいつてどれほど g	eneral terr	ど general term を使つてもその出來
事の uniqueness を説明することはできる。アレキサンダー大王のペルシャ遠征も、ナポレオンのエジプト遠征も、同	、ナポレオ	ンのエジプト遠征も、同

歴史事象の一回限り性について	と云わなければならない。	だから結局、歴史事象の一回的ということから歴史を科學と區別して、その	(4) そして事象そのものとしては、それが一般化されることも分類されることも排除しない。	を適宜に使わなければならないので、その論理的な法則には從うわけである。	(3) またそれを説明するさいには「因果的説明」causal explanation と「動機的説明」 motive explanation	(2) その unique な記述にも general term を使わなければならな	(1) 歴史家の記述の觀點の問題で、テーマの uniqueness 以上	以上要約してみれば、歴史の出來事の一回的ということは、	用語は"loose and porous"なのを発れないのであろう。	な定義をまつまではそれを使つてはならないというならば歴史は語れない。	記述的説明であるから、科學的用語を使つてもそれを日常語の語法に從つて使つてよいのである。またその用語の正確	とはない。なぜなら、歴史的說明は理論的說明ではないから、事物の定	しかしそうだからといつて、その general term は科學的に正確な	(2) unique な説明にも géneral term を使うことができる。	じ「遠征」という云葉を使いながらそれぞれの unique な説明はできる。	
(一十三)四五		、その sui generis を主張する根據はない、	類されることも排除しない。	従うわけである。	nation と「動機的說明」 motive explanation	よらないし、	以上のものではなく、			い。だからガーディナーがいうように、歴史の	って使つてよいのである。またその用語の正確	事物の定義的・演繹的説明ではなく單に事がらの描寫的・	general term は科學的に正確な語法に從つて使われなければならないというこ		る。だから、	

史 學 第三十二卷 第二號	(一七四) 四六
それなら、今、歴史の一回性を說明するのに general term か	を使つたり、或る法則を使うといつたが、それは一般
法則を「應用する」ということであるか。歴史的説明は科學的説明の應用であ	叻の應用であるか。
まず、ポッパーは「歴史の二つの仕事、卽ち因果のもつれを解くのと、	くのと、このもつれが織り込まれている偶然的なもの
を記述するのとは、二つとも必要である。そしてそれは互いに補い合つている。一つの出來事が或る時は typical と見	い合つている。一つの出來事が或る時は typical と見
られ、或る時は unique と見られる」といつているのであるが、その偶然的なものの記述を歴史的記述と見てよいか。	その偶然的なものの記述を歴史的記述と見てよいか。
彼の意圖は、 causal explanation の一般的な論理的確立のために特殊記述と	に特殊記述と一般法則の兩立・相補を主張しているの
であつて、歴史説明にも使えるというだけで、歴史的説明をそれ自體として確	巨體として確立することを目ざしているのではない。
個別的な特殊なものの記述は、一般法則から演繹して個々のケースの予測的な	スの予測的な結論を引き出すさいに、そ れ を 扶 ける
initial condition にすぎない。特殊記述を initial condition ど	にするなら、どんな科學者でもそれはやつているので、
特に歴史的記述というものではない。このように個別的なものの記述を一般法則が蔽う、	記述を一般法則が蔽う、もしくは一般法則の中に包み
こむという考え方をドレイは Covering Law Theory といつている	いる(ガーディナーは Regurality Interpretation
というが、ドレイのこのいい方の方が一般に使われている)。	
このような causal form を超えて covering law theory	をもつと一般的に押しすすめて歴史の場合に詳しくあ
てはめようとしたのがヘンペル C.G. Hempel で、彼は説明を「科學的說明」scientific explanation と「偽科學的	「科學的說明」scientific explanation と「偽科學的
説明」pseudo-scientific explanation の二つに非妥協的に分けて、	て、結局後者を驅逐する。それなら科學的說明として
の歴史的説明とはどんなものか。諸科學はその體系よりする固有の	の term をもつているから、歴史は historical term
によれ、という。しかし歴史は理論科學ではないから、固有の體系	固有の體系はない。從つて固有の歴史的用語というものはもつ
	I

	歴史事象の一回限り性について
generis を主張するのは誤りであつたが、またそれに反對するあま	形而上學的命題に固執して、そこから歷史學の sui gene
んめに必要な説明である。 イデアリストが歴史の一回性という	陷ら
ければならないということを示すのと同じではない」という微妙ないい方をしているのは、歴史的説明が、分類語や法	ればならないということを示すのと同じではない」とい
實際に有効であるとか、covering law の仕方で作用していな	を示すのは、その法則がそこに事實使われているとか、實
の下におくということに何も形而上學的妨げはないということ	法則の下におくこと自體ではない。歴史の出來事を法則の下におくということ
法 則 の下におくということが當然であるとしても、それは、	ドレイが、「たとえ、一ケースの分類がまずそれを一般法 則 の下におくとい
たと見てよいだろう。	Nowell-Smith によつて一應はつきりした線が引けたと見てよいだろう。
これでは「歴史的説明」というものは保證されない。 結局この誤りは Gardiner からだんだん脱け出して Dray	る。これでは「歴史的説明」というものは保證されない。
baum, Popper 等はみなこの同じ誤りに陷つていると見られ	かもしれないが、Hempel, White, M. Cohen, Mandelbaum, Popper 等は
の獨斷をもつている。これは或いは Max Weber 以來のもの	性の度合にあると見るような科學主義(狹い意味での)の
結局、理論科學と歷史學の相違を、共通に使われる法則の一般	消するかしかない。こうした covering law theory は結局、
なものなら、社會學的說明でなければならない、ということになる。結局、歴史的說明というものは科學以前か科學に解	ものなら、社會學的說明でなければならない、というこ
するのが歴史學である、という。この考えによれば、歴史的説明というものは、社會學に依存して、それが立派	「應用」するのが歴史學である、という。この考えによれ
歷史學と社會學の違いをどこにあるかというと、社會法則をモデルにして、それを「發見」するのが社會學で、それを	史學と社會學の違いをどこにあるかというと、社會法 即
日常語として使つているのである。だからヘンペルの要求は當らない。またホワイト M. G. White は、	にではなく、日常語として使つているのである。だから^
學の term である。しかもそれを法學的・政治學的・社會學的	それは歴史固有の term ではない。法學や政治學や社會學の term
「國家」とか「革命」とか「階級」とかいう term を使つても、	いないのである。歴史の記述に、例えば「王」とか「顾

ゆる理論的説明」の間にはつきりした線を引いておかなければならないだろう。Instance と generalization の關係 かの特徴を考慮しているのである。だから、「例」とか「例外」ということはもともと問題ではない。歴史家 が 闘心 したから、同じ general term を使つても、それによつて保證するものが違うのだから、結局「歴史的説明」と「あら だから、同じ general term に looseness が出てくるのは、歴史家がその term の定義においてないも或る特殊性と いる。こうした歴史の term に looseness が出てくるのは、歴史家がその term の定義においてなにも或る特殊性と いる。こうした歴史の term に looseness が出てくるのは、歴史家がその term の定義においてないも或る特殊性と いる。こうした歴史の term に looseness が出てくるのは、歴史家がその term の定義においてなにも或る特殊性と したから、同じ general term を使つても、それによつて保證するものが追うのだから大體漠然としたものになつてしまう、 開語法からとつてきたというよりもむしろ一般用語からとつてきているわけだが、歴史家はそういう目的をもつていない。 として」いうならそのうしろにある general law を保證しているわけだが、歴史家はそういう目的をもつていない。 のとして」いうなるのとは違つた現實の上 ないのである。これは科 するに歴史の説明は、分類語を使つても、それによつて保證するものが違うのだから、結局「歴史的説明」と「あら でから、同じ general term を使つても、それによつて保證するものだから大體漠然としたものになつてしまう、 開語法からとつてきたというよりもむしろ一般用語からとつてきているわけだが、歴史家はそういう目的をもつていない。 をもつ個別的なものは或る法則の「例」であつても、それによつて保證するものだから、結局「歴史の説明」と「あら でから、同じ general term を使つても、それによつてその分類の規準を保證しているのだから、結局「歴史の説明」と「ある。これは科 するに歴史の説明は、分類語を使っても、それによつてその分類の規準を保證していきりた線を引いておかないだけである。これは科 するに歴史の説明は、分類語を使っても、それによつてほないである、ただそれを「例」とはもともとは違った現実のです。 ないっても、これは指摘して、 なから、同じ general term を使っても、それによってその分類の規準を保證しているのである。これは科 のである。これは引 ない。 なから、同じ general term を使っても、それによってその分類の見準を保護しているのではないのである。これは科 なから、同じ general term を使っても、それによってその分類のただろいでから、 のだから、信じ ないのである。 ない。 ないのである。 なっても、それによってその分類のただそれを「例」ということはもともとは違いのである。これは科 ない。 ない。 ない。 ない。 ない。 ない。 ない。 ない。	ゆる理論的說明」の間に たから、同じ general だから、同じ general が例外的なものを考慮してい
一定を認めることではないのである。これで 一般として」云わないだけである。 で で から、結局「歴史的説明」と「 で から、結局「歴史的説明」と「 で から、結局「歴史的説明」と「 で から、結局「歴史的説明」と「	だから、同じ general をもつ個別的なものは或 ースの特徴を考慮してい か例外的なものを考慮し
たが、歴史家はそういう目的をもつていたでさえ、歴史家はそういう目的をもつていたのではないのである。これのだから大體漠然としたものになつてしきでさえ、歴史の term は形式的な科學の正では、歴史の term の定義においてなにも或る特殊その term の定義においてない。歴史家 がくことはもともと問題ではないのである。これも、	として」いうならそのうをもつ個別的なものは或ースの特徴を考慮していか例外的なものを考慮してい
それを「例として」云わないだけである。これでさえ、歴史の term の定義においてなにも或る特殊のだから大體漠然としたものになつてしきのだから大體漠然としたものになつてしきでさえ、歴史の term は形式的な科學の正でさえ、歴史の term は形式的な科學の正です。	をもつ個別的なものは或ースの特徴を考慮していか例外的なものを考慮し
、ことはもともと問題ではない。歴史家 が判斷を保證しているのではないのである。これのだから大體漠然としたものになつてしすでさえ、歴史の term は形式的な科學の正を保證しているのではないのである。これ	ースの特徴を考慮していか例外的なものを考慮し
を考慮したからではないのである。歴史家は、分類的な判斷を保證するようなものとは違つた現實のケ歴史の term に looseness が出てくるのは、歴史家がその term の定義においてなにも或る特殊性とてきたというよりもむしろ一般用語からとつてきているのだから大體漠然としたものになつてしまう、できたというよりもむしろ一般用語からとつてきているのだから大體漠然としたものになつてしまう、明は、分類語を使つても、それによつてその分類の規準を保證しているのではないのである。これは科明は、分類語を使つても、それによつてその分類の規準を保證しているのではないのである。これは科	か例外的なものを考慮し
歴史の term に looseness が出てくるのは、歴史家がその term の定義においてなにも或る特殊性というよりもむしろ一般用語からとつてきているのだから大體漠然としたものになつてしまう、いう説明を判別するのに大事なことである。ガーディナーでさえ、歴史の term は形式的な科學の正確な明は、分類語を使つても、それによつてその分類の規準を保證しているのではないのである。これは科明は、分類語を使つても、それによつてその分類の規準を保證しているのではないのである。これは科	
「祈しなくては、と云つている點にやはり covering law」の誤りに導く危險があるとドレイは指摘して、、、、、、と云つている點にやはり covering law」の誤りに導く危險があるとドレイは指摘しててきたというよりもむしろ一般用語からとつてきているのだから大體漠然としたものになつてしまう、的說明を判別するのに大事なことである。ガーディナーでさえ、歷史の term は形式的な科學の正確な明は、分類語を使つても、それによつてその分類の規準を保證しているのではないのである。これは科明は、分類語を使つても、それによつてその分類の規準を保證しているのではないのである。これは科	いる。こうした歴史の
てきたというよりもむしろ一般用語からとつてきているのだから大體漠然としたものになつてしまう、的説明を判別するのに大事なことである。ガーディナーでさえ、歴史の term は形式的な科學の正確な明は、分類語を使つても、それによつてその分類の規準を保證しているのではないのである。これは科考えますという規準で分类されることになって、そしてことを認めることでにたい」のでまる。	だからもつと分析しなく
的説明を判別するのに大事なことである。ガーディナーでさえ、歴史の term は形式的な科學の正確な明は、分類語を使つても、それによつてその分類の規準を保證しているのではないのである。これは科考えますという規準で分类されることになって、そし、ことを認めることでにたい」のでまる。 専	用語法からとつてきたと
明は、分類語を使つても、それによつてその分類の規準を保證しているのではないのである。これは科を表わすという規準で分类されることに依っている。ということを認めることでにたい」のでまる。専	學的説明と歴史的説明を
る表オ」すとしい 栽造て 夕美って とことに なーてして、 としいことを 認めて ことて にたし」の てまえ、 男	するに歴史の説明は、分
見たこしてそれと長ったここが見岸で子頂きれることに次つている。ということを恐らることでまない一つである。要	現象としてそれを表わす
す現象であるということは眞であるとしても、これを認めることは、そのいかなる說明も、或る法則に從つてくり返す	す現象であるということ
史の出來事は分類されるのだから、それはその多くの出來事が一つの分類語によつて記述されうるという意味でくり返	史の出來事は分類される
というなら、それは covering law の云い方であつて、歴史の云い方ではない。ドレイが注意するのはこの點で、「歴	というなら、それは co
とから、それなら歴史事象が説明されうるのならそれはくり返す現象でなければならぬという命題を支持しているのだ、	とから、それなら歴史事
反對の covering law の誤りに陷つてはなんにもならない。つまり、歴史家が分類語を使うというこ	り、反つてその反對の
學 第三十二卷 第二號	

歴史事象の一回限り性について (一七七) 四九
zation において真であつても、他の generalization からは偽である、という場合がいくつも出てくる。そのためい
はなく、その對象とテーマに應じていくつもの generalization を組み合わせて使うのであるから、一つの generali-
term がどんなに正確に定義されても、科學者とちがつて歴史家は一系列の generalization をもつて對象に向うので
technical を排除してしまうから具合が悪い)。正確な用語は正確に使わなければならない。ところが、一つの general
いが、正確な用語も入つている(その點で ガーディナーが、 歴史の term を單に non-technical といつたことは
な用語を使うのか、正確な用語を不正確に使うのか。歴史の記述の中には科學的に不正確な用語が入るのは止むを得な
だから loose になる、というのだが、これだけでは分析が足りないように思う。Loose であるということは、不正確
(I) ガーディナーは、歴史の記述に使われる term については、それが正確な科學的用語法による必要がないの
化されるかということも考えてみる必要があると思うので、若干の私見を述べてみる。
のように、歴史的説明と理論的説明をシャープに分けることは必要であるが、しかし歴史的説明自體がどの意味で科學
しかしそれでは、いくら法則や分類語を使つても、歴史的説明は科學的にされることはないのか。たしかに、ドレイ
いうことが結局は基礎理論に cover され限り、歴史の説明とすることはできないといわなければならない。
從つてポッパーやホワイトのように、歴史的説明の中に社會學的說明の「應用」を引き入れるということは、應用と
必要がある。
ではなく、illustration と theme の關係で見るのが歴史的說明であるといつた前述の區分をもう一度確認しておく

史 學 第三十二卷 第二號	(一七八) 王	五〇
わゆる例外や反證によつてその statement が崩されないのだから、その意味で歴史的説明はどうしても loose にな	歴史的説明はどれ	うしても loose にな
つてしまうのである。だから loose なのは、その組み合わせを歴史家が loose に	にするからであ	loose にするからであつて、term 自體が
loose なのではない。だからその looseness を脱け出るみちは、歴史家が(1)なるべく對象を限定して、(2)その	なるべく對象を日	限定して、(2)その
generalization の組み合わせを正しくする、ことである。 勿論これは云うに易く行	<行うに難いもの	易く行うに難いものではあろうが、これ
によつて歴史の説明がユニックな關心を保ちながら科學化される可能性があるという	いうことだけは云	ということだけは云つていいだろう。
(Ⅱ) その上にもう一つ科學的 term 自體の日常語化ということも考えられる。	專門 term	は、自然科學の記號
的な term は別だが、比較的日常語に近い社會科學的な term は、その極く一般化	板化されたものが	一般化されたものが日常語の中に入つて
常識化することは可能であるし、また現にしている。例えば「封建制」とか「社會主	曾主義」とか「生	社會主義」とか「生産」とか數えあげれ
ばきりがない。從つて、歷史的說明は理論的說明でなく記述的說明であるといつても、		general term が各専門分野で
正確に分析、定義され、一般化され、日常語化されるに從つて、それを使うことによ	によつて、極くゆ	とによつて、極くゆるくではあるが、科
學化しうる可能性がある。とくに歴史の關心が個人的な傳記のようなものは別だが、	か、社會生活に關	だが、社會生活に關するものでは、現在
ではその階層や社會體制の構造分析は次第に深まつているので、その分野の日常語け	語は單なる一般常	常語は單なる一般常識語よりはずつと科
學的に限定されたものになつている。 また分類語も豐富になつている。 だから、 それを對象に 應じて 適宜に使うなら	それを對象に 應	心て 適宜に使うなら
ば──その扱いにおいて前述の(Ⅰ)の二條件を充たせば──歴史的説明は科學化さ	化されるといえよ	學化されるといえよう。ただ勿論その場
合、term 自體の限定や定義はその領域の理論科學のすることであつて、歴史學の什	の仕事ではなく、	歴史學の仕事ではなく、歴史はただそれを使
ごくごく廻りみちをしながらということは止むを得ない。だから結局、歴史學は隣接、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、	弊接諸科學の發達につれて發g law way で使うのでもな	歷史學は隣接諸科學の發達につれて發達する、covering law way で使うのでもないから、

史 學 第三十二卷 第二號

(一八〇) 五二

討論形式のものでは、

Society, Proceedings, 1924. Symposium (Hannay, W. Carr, Nunn): The Subject-Object Relation in the Historical Judgment, Aristotelian

Symposium (Oakeley, Cornforth, Ginsberg): Explanation in History, A.S. Supplementary, Vol. XIV, 1935 Symposium (Gellner, Lucas): Explanation in History, A.S. Supplementary, Vol. XXX, 1956.

論文形式のものでは、

H. D. Oakeley, The Status of the Past, A.S. Proc. 1931.

" Perception and Historicity, ibid., 1937.

W.R. Mattews, What is an Historical Event, ibid., 1937.

J. W. Harvey, Knowledge of the Past, ibid., 1940.

H. Margenau, Physical Versus Historical Reality, in "Philosophy of Science", 1952

C. Frankel, Explanation and Interpretation in History, ibid., 1957.

V. Hinshaw, Objectivity of History, ibid., 1958.

A. Donagan, The Verification of Historical Theses, in "The Philosophical Quarterly", 1956

E. J. Tapp, Knowing the Past, in "The Journal of Philosophy", Vol. LV, No. 11, 1958

R. H. William, Causes of Events, ibid., Vol. LV, No. 7, 1958.

(笻) M. Oakshott, Experience and its Modes, Cambridge, 1933.

(석) Gardiner, op. cit., p. 39

15 L. von Ranke, Ueber die Epochen der neueren Geschichte, 1921, S. 4.

(ff) Gardiner, op. cit., p. 43

(17) Popper, op. cit., p. 11.

(A) Nowell-Smith, op. cit., p. 136-7.

(19) Dray, op. cit., p. 83.

(없) Gardiner, op. cit., p. 93.

(집) Popper, op. cit., p. 147.

22 Popper, The Open Society and Its Enemies, Vol. II., London, 1952, p.262. Poverty, p. 122-3.

23 C.G. Hempel, The Function of General Laws in History, in "Journal of Philosophy", 1942.

(젃) M.G. White, Historical Explanation, in "Mind", 1943.

25 ドレイの分類によると、Idealistには Oakshottと Collingwood があげられ、Covering law theoristには Popper, Hempel, (Dray, op. cit., p. 1-12, p. 46.)。勿論この分類はだいたい妥當だが、それを問題史的な關係から見ると前述(一の解說)のよ Analysis in History) がそれに加えられている。そして兩者の折衷論者としては Mandelbaum と Walsh があげられている White があげられ、また別に M. Cohen (Causation and its Application to History) と Mandelbaum (Causal

(원) Dray, op. cit., p. 46.

うになるわけである。

(컶) Dray, op. cit., p. 48-9.

(\mathcal{R}) Dray, op. cit., p. 49.

29 "It would be very natural to draw a sharp contrast between historical explanation and all theoretical ones." Dray, op. cit., p. 84.

(本稿は昭和三十三年度慶應義塾學專振興資金の補助による研究の一部である)

歴史事象の一回限り性について

(1入1) 五三